

# 中日文化比較論

## —類似と相違の探究—

702-026 王 延 指導教官 千葉 貢

### Comparative Arguments Focused on Chinese and Japanese Cultures: The Search for Differences and Resemblance

WANG Yan

#### 1. はじめに

中国と日本は、古代から現在にいたるまで長期にわたって文化交流を行ってきたが、長い歴史のなかではお互いに相手の文化に対して優越感を持ったり、劣等感を抱いたり誤解したりしてきたと言っても過言ではない。今まで、中国は五千年の歴史と伝統文化を誇りつづけてきた。中国の本土では中国文化と中華思想に対して過剰な優越感を持ち、特に日本に対して文字から宗教、思想まで教えてやったというような認識を持つ人が決して少なくないと思う。

したがって、本研究は日本がどのように中国文化の影響を受けたかという論述は避けて、日本文化をすべてその民族の固有文化として対等に比較分析を試みながら探究し私なりの見解を述べた。

文化は比較なしに、その民族の文化の特徴は明らかにならないのである。異文化の間に比較があつてこそ、それぞれの文化の特徴が浮かび上がってくる。比較文化研究の最大の目的は、異文化との比較を通して自国の文化を再認識すること、すべての異文化に対して対等に評価すること、そして異文化を理解することによって異文化間の誤解を除去することだと私は思う。中日両国は漢字文化と儒教文化とを共有しながらも、両国文化間にはいろいろな違いも見られる。本論文はこの両国文化の類似と相違とを研究することを目的としている。

#### 2. 技術の文化—日常生活(暮らし)の比較

文化人類学とは人間が生活していくために用いたさまざまな知識の体系のことである。身近で日

常的な現象レベルでも衣、食、住、などの対比から、両国文化の異質性も明らかになる。歴史を振り返ってみると、人類は食物を探して食べるために箸文化、食器文化、料理文化等の、多くの文化を創造した。食は文化の源と言っても過言ではない。

例えば、箸の置き方の違いからみると、日本では食事の時、箸を手前の横に置くことが一般的である。一方、中国では日本と違い、箸は縦に置く。これは文化的な違いが現れている可能性がある。

「箸食」は日本、中国、韓国などが行っているが、ところ変われば箸の役割もちょっと違うようだ。中国では、箸を使ってご飯やおかずなどを食べて、スープなどはレンゲを使って食べる。また韓国では箸はおかずなどで使い、レンゲでご飯や汁ものを食べる。日本人は、ご飯やおかずを食べ味噌汁を飲むのにスプーンやレンゲは使わず箸だけで食事をする。中国は円卓を食事に用いて、箸を縦に置いた場合、横に置くよりも箸は中心を指し示すことになる。一方、日本では膳を用いる場合、円形に並ぶことはなく、中心という意識は希薄であるといえる。日本と中国の箸の配置の差異によって、中国は日本よりも中心の存在を強く意識しており、箸の置き方にも現れているこの中心の存在意識の違いを生み出した理由のひとつを自然と人間の関わりにみることはができるのではないだろうか。

鳥料理を例として、鶏は頭から足の先にいたるまで全ての部位が様々に調理されている。日本人から見れば殺生を思い出させるグロテスクな部分（頭、足、内臓、血等）を使い、生きていた頃の原形に近い形状（姿蒸しや丸焼き等）をしたものが余りにも多い。わざわざその部位を選び、手間をかけて丸ごと調理し、あるいは取り出した部位を生前の形に戻して食卓に並べる感覚は日本人としては理解に苦しむだろう。

中国人と言っても、漢民族もありモンゴル、維吾爾族（ウイグル）などの少数民族もあり、同じ漢民族でも地方によっては同じ民族とは言えないような違いがあるので、とても「中国人の味覚は……である」と言い切ることはできない。日本人は、食べ物をお口に持った途端、「おいしい！」とか表現するのが一般的であるが、中国人は「好香！」（ホーシャ）という。日本人は、魚の生臭さについてはほとんど抵抗感がないようだが、中国人はわずかな魚の生臭さに対しても敏感に反応し、「有腥味！」（ヨウシウエ）と表現する。舌と眼で食べるのは日本人で、舌と鼻で食べるのが中国人なのだ。新たな文化の創造、発展というものは、異文化との接触によって促進されるものであり、日本人も「舌と眼で食べる」だけではなく、さらに「鼻で食べる」感覚を取り入れることが、日本の食文化も新たな発展をするのではないかと思われる。

歯応えに対する感覚の評価は、日本人も中国人も同じだが、中国料理のうち、特に肉類は、熱を十分通すことが一般的なため、歯応えのある料理はそう多くはない。この点、日本人の場合は、中国人よりも生で食べることには抵抗が少ないので、歯応えを追究しやすい土壌にあると言える。また、日本には「餃子定食」というのがある。これは中国人にとっては、まったく理解を超える食べ物である。というのは、焼き餃子を含めて餃子は、中国ではご飯と同じ主食として認識されているからだ。餃子をおかずにした「餃子定食」のように、新しい文化を導入して、それが思わぬ方向に

行ってしまったものも、過去における日本と中国との食文化の交流にはあるし、今後も起り得ることである。それは善し悪しの問題ではなく、日本の食文化を豊かにするのであれば構わないのではないかと思う。一方、最近では日本から中国に導入されて来ている食品も幾つか出てきている。刺し身も、既に日本語がそのまま中国語と化している。以上、中国人の食文化のほんの特徴的な一端と、日本のそれとの比較をしてみた。

着物は日本の独特な民族衣装である。着物は脚まで隠して、日本人の雅びさと女性らしさを表現しようとしている。実際に日本の生活のなかで身を持って経験すると、やはり着物とは、日本人の生活習慣と日本男性の美的意識と切っても切れない関わりがあると気がついた。中国人の私から見ると、日本式家屋の天井は中国式より低いというのは、中国人は椅子に座る生活に対して、日本人は畳に座る生活だからだと思う。それで日本人の辞儀の習慣と身体を前に傾けながら、歩く姿が身についたと同時に、畳の生活は着物が日本女性の伝統的な服装となった主な原因だと私は思う。着物とは対照的に中国のチャイナドレスは、女性のスタイルをアピールし、着る人に自信を持たせる。あまりにも体にピッタリしているので、スタイルに自信のある女性しか着ない。チャイナドレスにせよ、着物にせよ、どちらもそれぞれの国の生活習慣によって、なされた人々の美的意識に応じた上で、民族文化の一部となったのではないだろうか。

また、茶の文化を「行為」の背景にある精神性の面だけから捉えようとする、日本においてはそれが直ちに茶道の文化を意味してしまい、結局は日本の歴史的な特性とか日本人の精神文化の特色という部分に包含してしまうことが多かっただろう。茶を飲むという事について日本人に話す場合には「茶をいただく」と言うこともあるけれども、あとは「茶を飲む」と言い方もある。茶を入れるということは、日本人は茶を飲めるような状態にすることを普通「茶を入れる」と言い、茶の湯の場合に限って「茶を立てる」と言う。中国人は「茶を入れる」ことを沖茶（チョンチャ）、泡茶（パオチャ）と言う。日本人は中国人に聞いて見なければこの言葉の違いは分からないが、そのいずれも日本語にならなかったことは面白い。日本語の「茶を注ぐ」は、中国語では倒茶（ダオチャ）と言う。「茶を供する、茶を御馳走する」は中国語では進茶（ジンチャ）が専らこの意味で使用される。「茶をすすめる」という意味に取れば、日本人にも分かる言葉である。日本の地方では「茶」という一語で茶のように飲用する嗜好品をすべて表わすこともある。したがって、中国と日本の茶文化の差異によって、茶に関する言葉と表現もそれぞれ特徴を持っている。

例えば、中国の雲南省の少数民族の人たちに飲まれていたお茶は、それぞれの民族によってもややその形態が違うようだ。少数民族特有の茶も保存されており、竹筒茶（ズウトンチャ）や三道茶（サンダオチャ）などがその典型である。「三道茶」は雲南省の北方にいる民族「白族」（ペー族）の風習で、客をもてなす時に出すものだ。先ず「苦茶」（クツチャ）、これは相当苦いと言われている。その後は棗（なつめ）や角砂糖などを入れた「甜茶」（タンチャ）がだされ、最後に「先苦後甜」の「回味茶」が出てくるのだが、回味とは振り向く事を意味しているのだそうだ。ここでは苦さと甘さが一緒になった茶が用意される。つまり、「我慢して苦いことが終われば、甘いことが必

ずやって来る。甘いものを味わってから、先の出来事をもう一度振り返れば、その教えが分かる。」という中国の“苦尽甘来”という言葉をそのまま体験するものなのだ。人生に喩えるかのような意味を込めて茶が出される、この三道茶なるお茶は、中国の茶文化の中でも珍しい作法である。

### 3. 価値の文化

中国では日本の大衆文化の産物が国境を越えて広く受け入れられ、中国の若者文化に非常に大きな影響を与えている。例えば、中国では子供の頃から日本のアニメを見て日本に興味を持つようになったと言う人が非常に大勢いる。そして、音楽の分野や中国のケーブルテレビの番組、漫画の分野などの、日本の各種雑誌はすぐに翻訳され、紹介されていると言っても言い過ぎではない。幾つか見てきたように、中国では日本の大衆文化の産物が国境を越えて広く受け入れられ、中国の若者文化に非常に大きな影響を与えている。中国、特に上海は日本の若者文化の産物がより好まれてきたのは、日本の若者文化がアメリカ文化に対する東アジアでのクッションの役割を果たしてきたからなのかもしれない。中国で受け入れられている日本の文化を見ると、子供の時代から娯楽として親しんできた漫画やアニメが、立派に精神的な交流の架け橋の一つになっていることが非常にはっきり分かった。この些細な、庶民的で親しみやすい文化こそ日本文化であり、文化とはそう言うものだと思う。

そして、現代日本でも中国の古典文化から影響を与えられている。麗江のトンパ文字を例として、キリンビバレッジから2002年2月26日、「日本茶玄米」が発売された。容器に使用されている文字が、トンパ文字だった。この文字は中国雲南省の麗江市のナシ族が千年あまり前に作り出した表意象形文字であり、民間故事や伝説、宗教経典などを著した。この文字は、経典を書写するのに用いたところからトンパ文字と呼ばれる。トンパ文字の素朴な美に対して、中国人にしても日本人にしても皆が重視している。象形文字のような表意文字は、現在の日本における、特に最近流行のパソコン通信でのノンバーバル・コミュニケーションや絵文字などによく用いられる。

両国の宗教を見よう。西洋文化における宗教は基本的にはキリスト教であるが、日本文化における宗教は、仏教、道教、儒教を基本としている。インドに生まれた仏教は中国に渡り、中国で中国化していくし、中国に生まれた道教、儒教は韓国に移植されて、韓国的な変容を経た上で日本に伝わったり、あるいは直接日本に伝わったりして日本化されていく。そうした変容を受けながらも、これらの日本の宗教思想は中国の文化に強い影響を与えてきた。

### 4. 社会の文化

私は地理学への興味を持ちながら、日本での生活を契機として、特に風土について、日本の自然が日本人の生活、考え方にどんな影響を及ぼしているのかを分析した。風土の第一前提は人間であ

る。景観十年、風景百年、風土千年というおもしろい言葉がある。風土千年は正しい概念だと思う。民族の歴史の積み重ねと生活に根ざしたものとして風土というのがあり、自然と切り離せないということなのだ。例えば、季語は日本の風土性を知る道具である。季節の変化をあらわすものに俳句の季語があり、日本人というのは自然に至極敏感である。大切にするというのとは違うかもしれない。自然に生活をぴったり合わせるといのは、かなり特徴的なのではないだろうか。これは日本文化のすばらしい特徴で、今でもその伝統は生きている。新聞には毎日のように自然に関する記事が出ている。

日本文化と原風景とは関係がある。ある人にとっては田園風景であろう。またある人にとっては海辺の漁村風景かもしれない。こうしたいわば日本の原風景ともいべきものを形作っている諸要素、それが日本文化として具体的にイメージできるものではないだろうか。黄河周辺は中国文明の発祥の地だ。華北平原を流れる黄河に、肥えた土が流れ込み大麦、アワ、キビの雑穀地帯をつかって、雑穀による農耕文化が非常に発達してきた。例えば、私の出身地の陝西は、北の方はアワ、キビの雑穀地帯で、中部は主な小麦農耕である。秦嶺（チリン）の南は稲田農耕であるから風景は日本とよく似ている。

日本はモンスーンの風土の特殊形態によって、モンスーンの性格になるそうで、受容的・忍従的である。四季おりおりの季節の変化が著しいように、日本の人間受容性は調子の速い移り変わりを要求する。だからそれは大陸的な落ち着きを持たないとともに、はなはだしく活発であり敏感である。活発敏感であるがゆえに疲れやすく持久性を持たない。日本人が挨拶するとき、「疲れた！」という言葉が少なくない原因ではないだろうか。

中国の風土を代表的に示しているのは黄河と揚子江であろうが、少なくとも揚子江はモンスーンの大陸の具象化だといってよいであろう。黄河が砂漠から出てくる川であるという一語によって言い尽くせるであろう。黄河とは砂漠とモンスーンとを媒介する川なのである。こう考えると中国の人間は砂漠的なものと無縁ではない。中国人に著しく意志の緊張があり、その忍従性の奥に戦闘的なものを潜めている事は、モンスーンの性格と砂漠的性格との結合を語るものであろう。

民族の概念を考える上で大きな要素になるのが言語である。類似する言語を使用していれば、大まかに言うと同一文化圏とみなす事ができるのである。少数民族の言語が中途半端になることはその民族の文化、アイデンティティの喪失につながるのである。日本の言語政策において公用語とは現在日本語だけである。島国であり貿易立国である日本にとって国民が英語を使いこなせるようになることは日本にとっても日本人にとっても大きな利益になるであろう。それでいて将来日本語の衰退をもたらし、文化破壊をもたらす恐れがある。

例えば、中国の内モンゴルはモンゴル語が話されている。中国語からの外来語が多く、漢語がそのまま入ってくる。この点については日本語のカタカナ外来語の使い方とよく似ている。そして、都市部は完全に漢族の世界になっており、フフホト市でさえモンゴル語で教育を受けるのは、ほとんど不可能と言ってもよい状況である。たとえ家庭で努力をしたとしても限界があり、どんどん漢

語を取り入れて、結局モンゴル人なのにモンゴル語ができないようになる。

言語を失うことによって民族の文化、アイデンティティが喪失するということは、日本のアイヌ民族の場合がひとつ例ではないだろうか。

## 5. 言語文化の比較

対人関係の持ち方の違いは、現代の文化を育んだ歴史が多く影響していると思われる。日本では自分がその都度所属している集団を重要視する。日本文化では「うち」と「そと」、「裏」と「表」、「本音」と「建前」の語を用いて、対人関係の構造が明らかになる。これに対して中国は、儒教文化を背景に持った家族中心の血縁関係を重視する民族である。中国人は他者に向けて「面子」を重要視する。「面子」に直面する時にお互いが尊重するものであり、傷つけてはならない大切な「面」である。

家中心、集団中心とする日本文化での対人関係の持ち方と、血縁を中心とする中国文化での対人関係の持ち方とを、日常用いられることばを比較分析することによって、両国文化間の対人関係の違いを明らかにした。また、文化を背景として生ずる対人関係の様式が、その国の文化的な特有である国民性格の特徴を醸成する可能性についても若干考察した。

## 6. おわりに

ある民族の文化的活力を海外文化との接触の仕方から考えてみると、日本と中国ではかなり対照的なところがあることに気がつく。中国社会の文化的活力を端的に示すものとしては、食べ物の流行がある。例えば、日本の「しゃぶしゃぶ」、日本のラーメンなど、日本の食文化に大変な関心が集まっている。ただし料理で言えば、日本の食文化には、調理法が未発達な部分があり、中国のように元からあるもので対応しきれるかどうかといえば、かなり疑問がある。代表的なものは「日本式カレー」だろう。従って、日本人より味の好みに幅があり、柔軟性があると言える。これは、異文化として元々あったものを、自分の持っているものを通して濾過することによって、元々あったもの以上の良さを引き出す、あるいは自分の新しい持ち味を生み出すということである。

かつての日本文化には確かにそうした弾力性、柔軟性があった。しかし、日本のこうした文化的活力は今、衰えかけている。先ほど料理の場合にふれたように、海外の文化に触れた場合、「本家」志向が人の行動において異常に強くなり、消化や昇華ではなく、同化しようとする傾向が強まっているようだ。テレビや雑誌などで流布される家族関係や人生設計は、明らかに「欧米」モデルを前提とした話ばかりだ。逆に、中国社会にある活力は、自分が大事にしている価値観がはっきりしているところにあるといえるかもしれない。文化的活力を取り戻すためには、食物や言葉や家族のような本当に身近なところで、そのような明快さ、簡潔さ、自己との一体感を回復させることが必

## 中日文化比較論

要だと、日本と中国の人々の生き方が私に教えてくれている。

### 参考文献：

- 本田總一郎『箸の本』日本事業出版社、1985  
岡倉 覚三（著）、村岡 博（翻訳）『茶の本』岩波文庫、1961  
山下晋司『文化人類学キーワード』有斐閣双書、1997  
岡本雅享『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社、1999  
陶立番（著）、上野稔弘（翻訳）『中国民俗学概論』勉誠社、1996  
ポール・L・スワンソン、林淳『異文化から見た日本宗教の世界』法蔵館、2000  
岡田啓助『日本文化を知る』おうふう、2001  
佐々木利和『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館、2001  
大河内了義『異文化理解の原点』法蔵館、1995  
佐口透『ロシアとアジア草原』吉川弘文館、1968  
真田信治、陣内正敬、杉戸清樹『社会言語学』おうふう、1992  
金子亨『先住民族言語のために』草風館、1999  
河原俊昭『世界の言語政策』くろしお出版、2000  
三浦信孝『多言語主義とは何か』藤原書店、1997  
三浦信孝、糟谷啓介『言語帝国主義とは何か』藤原書店、2000  
宮岡伯人、崎山理『消滅の危機に瀕した世界の言語』明石書店、2002  
中国社会科学院民族研究所編『中国少数民族言語使用情況』中国藏学出版社、1994  
中央民族学院少数民族語言研究所編『中国少数民族言語』四川出版社、1987  
烏蘭図克『内蒙古民族教育概況』内蒙古文化出版社、1994